ホルトノキ

春を告げるスイセンの香り

立教池袋高等学校

高校卒業生へ
もう子どもではない

校長　豊田　由貴夫

皆さん、卒業おめでとうございます。

毎年、卒業の挨拶では、これで皆さんは社会人への一歩、大人への一歩を踏み出すことになる、そういう言い方をしてきました。

しかし今年は違います。みなさんは法律的にももう大人、成人になります。二〇二二年四月、すなわち今年の四月から成人年齢が引き下げられて、二〇歳から十八歳になります。

親の同意がなくてもさまざまな法律行為、すなわち契約ができます。一人で自分の住む場所を決められます。クレジットカードを作ることができます。進学や就職の決定が親の同意なしで一人でできます。

さらには、やはり今年の四月に少年法が改正され、罪を犯した場合、実名で報道されることがあります。

ということで、みなさんは大人への一歩を踏み出したというわけではありません。もう法律的にも大人、成人になるわけです。

このために高校生にはいろいろと教育を行わなければいけないと言われてきました。皆さんもこの成人年齢引き下げに伴う話を聞いたのではないかと思います。簡単によくわからない契約をしないように、うまい話には気をつけるように、そのような注意がされたかもしれません。

しかしただそのような注意をするだけでなく、同時に考えてほしいことがあります。

これまで二十歳だった成人年齢が引き下げられたのは、それなりの意味があります。それは、皆さんに社会で一人前の存在として活躍してほしいという意図があるのです。皆さんに、社会の一員である、社会を担っていく存在であるということを強く意識してほしいという狙いがあるのです。

今、我々の社会は大きな課題を数多く抱えています。日本では経済の停滞が言われています。また経済格差はますます広がっています。そして世界に目を向ければ、地球の環境は日に日に危険な状態になってきていると言われています。現在進行している新型コロナウイルスの感染拡大への対応も大きな問題です。未だに感染の収束に完全に成功した国はありません。

それらの問題に対応するためには、皆さんの新鮮な、そして柔軟な感覚が必要なのです。皆さんに社会で活躍してもらい、是非組織の中心になってもらいたいということです。選挙についても一足先に十八歳で投票ができるようになりました。皆さんには十八歳で大人になるという強い意識を持ってほしいと思います。

今後もほとんどの人が大学で勉強を続けることになりますが、立教池袋高校で身につけた力を活かし、社会で活躍するリーダーとなる、そのような意識を持って卒業後も過ごしてください。

中三組主任より

やっぱりこの言葉を

進学に備え中学校生活を振り返るプリントで「あなたの長所は」という質問があった。「そんなものはない」、「わからない」。君たちからはそんな反応が少なからず返ってきた。学校でにぎやかに過ごしていても、どこか自信が無く、何を生活の核にすればよいかわからない。そんな様子が感じられた。自分の存在価値は何か。聖書では神と他者への愛が人間の存在意義だと述べているように私は思う。君たちには、一生懸命努力をして自分を高め、そこで得た力を他人や社会のために役立てて、人から感謝されるような生活を作り上げて欲しい。感謝されれば素直に嬉しい。そうしたときに自分の存在価値も認められるようになるのではないか。「向上心と隣人愛」。もう耳慣れた言葉ではあると思うが、やっぱり卒業する君たちにこの言葉を贈りたい。

（一組　重原康秀）

世界の色は変わる

卒業おめでとう。

入学の時と同じように、卒業のこの時も国語の入試に出題した作品（『非接触の恋愛事情』）の一節を紹介したい。

「好きなことを好きと言えて、『自分も』と答えてもらえる。それだけで僕は、世界の色が変わる気がした。」

「好きなことを好きと言える」環境はそう簡単には生まれない。まずはとことん突き詰めて自信が持てないと言えることではない。そしてさらに、他者と互いを認め合い、尊重し合う環境でないと、安心して言えない。でも、三年間立教池袋中学校で過ごした君たちには、この環境を生み出すことは容易なはずだ。

そしてその環境下だと「自分も」と答えてくれる他者が現れる。共有がこれほど嬉しくて楽しくて心強いことはない。ステージがあがるにつれて、「自分も」と答えてくれる人は、必要だし、きっと増えていく。

こういう時に、世界の色は「変わる気」がするのではなく、確実に「変わる」のだ。この感覚を君たちにも味わってほしいと切に思う。

（二組　永田真一）

苦難の中に

「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。（ヨブ記　一：二一）

皆さんの中学生活はコロナによって苦難の連続でしたね。一年生の後期総合テストが無くなったことから始まり、二年生の前期はほぼなし、清里キャンプもなし、校外学習もなし、体育祭は三年生でできたけど縮小。学友会も思ったようにできない。「何で自分たちは悪いことをしていないのにこんな目に合わなければならないんだ？」こう思った人は多いはずです。

冒頭の聖書はヨブという人の言葉です。このヨブは、悪いことをしていないのに多くの災いが起こりました。ヨブは、最初はこの言葉のように立派なことを言います。しかし、あまりにも多くの災いが続くため、ついに「何でこんな目に…」と、思い始めました。最終的には神様が出てきて考え方を変えました。

（細かいことは聖書を読んでみよう！）

この聖書の解釈は難しいですが、私は次のように考えています。この世は良いことばかりではなく、苦難もある。その苦難をなぜ？と思わず、どのように捉えるか（生きるか）考えなさい。

長い人生苦難はあります。この中学生活でも多くの苦難がありました。この苦難を悪いことだったと思わず、次のステップにつながるように考えられると良いですね。何だか暗い話になったので最後は明るく。

「あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」（ヨハネ　十六：二〇）

（三組　吉井佑介）

Shoot for the moon
Even if you miss, you'll land among the stars.

僕が高校を卒業する時、アルバムに書いてもらったこの言葉が、今でもすごく好きです。意訳をすれば、「大きな目標に向かって挑戦しなさい。そうすれば、たとえそれを達成できなくても、何か価値あるものを得られるから。」という意味になるでしょうか。

これまで自分が挑戦した物事について「全て思い通りになった」という人は少ないかもしれません。でも、その過程で身に付けた力や人との繋がりは、自分自身を支えてくれる大きな柱になっています。中学校生活の中で手に入れたその柱を、ずっと大切にしてもらいたいと願っています。

様々な活動に制限があったなか、前向きにそして逞しく成長した君たちを、僕は心から尊敬します。これからも挑戦する心を忘れずに、自分の道を突き進んでいってください。

卒業おめでとうございます。

（四組　新島　亮）

高三組主任より

努力は報われる

「報われない努力ってあるな」とあるアスリートが発した。私はこの発言と三年生諸君の高校生活とが重なった。この二年、君たちにとっては、まさに「報われない努力」の連続だったのではないか。何かが延期や中止になるたびにこのアスリートと同様の気持ちを味わったのだと思う。そんな君たちに何と言葉をかけてよいのか、正直わからない。この晴れの日に手放しで「おめでとう」という言葉をかけてよいものなのかと躊躇してしまう自分がいる。しかしながら、君たちがこれから歩んでいく道では「報われない努力ってあるな」と思うことの方が多いのかもしれないとも思う。この二年をコロナのせいにも正当化するつもりは毛頭ない。ただ、報われなかったとしても、その努力は決して無駄になるわけではないと強く思う。その努力を重ねることがその人を成長させてくれるのだと思う。そしてときにそれが人に力を与えてくれることも。現に私は、君たちの姿に何度も勇気づけられ、力をもらったおかげで今日という日を迎えられている。君たちの洋々たる未来を心から祈っている。

本当にありがとう。

（一組　藤本　勉）

透き通る気持ちで

パンデミック下のベストセラー『ペスト』を著したカミュは「不条理への反抗」を文学的主題としていた。どんな運命に翻弄されても決して諦めない人間の有り様は『ペスト』にも顕著で、主人公のリューはペストとの闘いを「果てしなく続く敗北」と形容する一方「けれども、それは闘いをやめる理由にはなりません」と医師としての責務を全うしようとする。この姿勢こそがカミュの「反抗」である。

君たちが入学した三年前にはこんな未来が待ち受けていることなど誰にも予想できなかった。卒業式を間近に控え、あり得たはずの思い出のことばかり考えてしまうが、世界は既に変わってしまった。私も君たちも自分と他者の尊い人生のためにこの世界で何とか「反抗」して生きていかなければならないのだろう。

この三年間を通じて様々な場面で君たちの強さを目にしてきた。心から満足していく三年間ではなかったかもしれないが、思い出の代わりに得た経験もきっとあるはずだ。そんな君たちなら自分の力で活躍し生き抜いてくれると信じている。どんな不条理に見舞われても決して諦めないこと、それだけは忘れないでと欲しい。

卒業おめでとう。

（二組　高井祐紀）

新しいリーダーシップ

立教池袋が力を入れている「リーダーシップ教育」が目指す「新しいリーダーシップ」は、「目標共有・率先垂範・同僚支援」を最小三要素とし、誰でも発揮でき、権限を必要としません。リーダーシップ概論を履修した人は何度も聴いた話でしょう。先進的な行動論に聞こえますが、立教池袋で学んだ君達にとっては、少し意識を変えるだけで誰でも「新しいリーダーシップ」を発揮できるはずです。

コロナ禍において、制限された環境の中でも、出来ることを手探りで実現したR・I・F・Fのオンライン開催、久しぶりに開催できた体育祭での団結力、互いを尊重して認め合う関係が、できていた学年の雰囲気など、明確な目標を掲げ、率先して行動し、仲間と支え合う新しいリーダーシップの三要素を実践してきたと言えるのではないでしょうか。

「一番先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

（マルコ　九章三五節）

立教池袋高校を旅立つ君達が、新しい世界で存分に力を発揮し、活躍されることを、お祈りいたします。

（三組　後藤　寛）

始まり

卒業式はアメリカ英語のフォーマルな表現でcommencementと言う。英和辞書で引くと「学位授与式・卒業式」とともに、「開始・始まり（=beginning）」と載っている。漢字の「卒」には「終える」という原義があることを考えると、物事の捉え方や視点の文化的な違いに気づく。

もう一つ、卒業といえばgraduationが頭に浮かぶだろう。語源を辿ると「階段・段階」とある。「学年や成績段階」を意味するgradeも関連している。

つまり、「卒業」というが、人生という旅（career）の始まりに過ぎないのだ。そしてこれからも階段は続いているのである。新たな一歩を上段に向かって踏み出してほしい。過去の自分を背負いながら。

では、どんな頂上を目指すのか。それは自分の「テーマ」を見つけるまでもがき続けることだ。興味・関心が定まらないという悩みをよく聞くが、泥臭くもがき続けるしかない。失敗しても、格好悪くていい。葛藤したり、揺れたりしていい。それは階段を上がっている証拠だ。安住ではなく、次の階段を踏む時には力が要るのだ。

今日は始まりの日。

卒業おめでとう。

（四組　小林隆史）

自己推薦

自己推薦は七項目あり、その中から三項目まで申請できます。今年度も殆どの生徒が学習面と生活面から申請をしました。

学習面は三年間でA合格（B合格二個でA合格に相当）が四三名。生活面では中高六年間精勤または高校三年間皆勤が七九名。

共に学校生活において大変努力した結果であると思われます。

満点の一五〇点が十六名、一二〇点以上が八六名の結果でした。

※卒業生受賞者については式当日配布の式文をご覧ください。

2022年度　立教大学　推薦入学者数

学部	学科	専修	推薦枠	合格者数
文	キリスト教		2	0
	史	日本史学	8	6
		世界史学		
		超域文化学		
	教育		3	4※
	文	英米文学	6	1
		ドイツ文学	2	0
		フランス文学	2	1
		日本文学	4	2
		文芸・思想	3	3
経済	経済		13	13
	会計ファイナンス		7	7
	経済政策		7	7
理	数		（2）	3
	物理		（2）	1
	化		（2）	0
	生命理		（2）	0

※　それぞれ新座校より１つ枠を受ける。
理学部は、各学科４名まで。ただし、理学部全体では８名まで。

学部	学科	推薦枠	合格者数
社会	社会	6	6
	現代文化	6	6
	メディア社会	6	6
法	法	14	14
	政治	4	5※
	国際ビジネス法	4	4
観光	観光	7	4
	交流文化	6	0
コミュニティ福祉	福祉	6	0
	コミュニティ政策	6	1
	スポーツウエルネス	4	3
経営	経営	9	9
	国際経営	7	7
現代心理	心理	6	3
	映像身体	6	4
異文化	異文化コミュニケーション	6	6
ＧＬＡＰ		1	1
合　計		169	127

今月の聖句

[2]The glory of God appeared to our father Abraham…[3]and said to him, "Get out of your country and from your relatives, and come to a land that I will show you.
Acts 7:2-3

These words were said by Stephen as he was recounting the history of his forefathers. They are words of departure, for Abraham was told by God to leave his family and his surroundings in order to make a new beginning. Abraham's story is brought forward to the present, for, as we end one school year, we prepare for a new one, just around the corner. For many of us, the change is real and will instill new memories. Most of those memories will be good, but perhaps a few of them will be not so good. Departing can be a sad thing to experience, but for most of us, it means new adventures, new surroundings, and a new chance to find concrete meaning in our lives. In Abraham's case, it seems very dramatic. God appearing and telling him to leave was perhaps something he did not want to hear. Perhaps he was content, feeling attachment to his surroundings, his family, his lifestyle. But perhaps this encounter was something that came to him because he was *not* content, felt some need to leave his surroundings, some antagonism with his family, or some restlessness about his lifestyle. We will never know the real reason, but the point is that Abraham *did* leave, following the word of God to a new land. He is known as the father of three religions because the Jews, Christians, and Muslims all claim him, rightfully, as their founding ancestor. I doubt any of us will have that kind of fame, but what is important for us to remember is that our real feelings (just as Abraham's were) are a constant reflection of what God wants for us. Praying brings us closer to God and hence, closer to ourselves. My wish is that all the new graduates will deepen this relationship as they leave for new endeavors.

Fr. Mark Stahl, chaplain

英語条項

今年も英検・ＴＯＥＩＣで、ハイスコアを取った生徒が大変多かったようです。一二七名が認定され、このうち、英検二級（またはＴＯＥＦＬ・ＴＯＥＩＣ等で同程度のスコア）以上の有資格者が一〇七名となりました。

2022年度 立教大学被推薦者の英語条項

英検2級（TOEFL、TOEIC等も含む）以上で認定	84%
英検準2級（TOEFL、TOEIC等も含む）＋αで認定	16%

中学一年便り

「聴く」の次

一年を振り返ってどうだったでしょうか。それには初心に立ち返る必要があります。君に最初に配られたホルトノキに私は「生き方の基準を持て」初瀬川先生は「お互いを大切にせよ」田部先生は「応援される人になれ」吉田先生は「違いを認め合い、尊重し合え」とそれぞれ書いています。まさにもう一度読み返して欲しいところです。それを踏まえ、この学年は「聴く」をテーマに活動を進めてきました。さて、君はどれくらい意識して生活し、自分の成長の糧とできたでしょうか。授業にしろ講演にしろ、全身全霊をかけて「聴く」ことはできましたか？　時は止まってはくれません。成長できた人も、できなかった人も強制的に次のステージに移行します。

「聴く」の次は「書く」です。インプットした事や自分の内にある有象無象をアウトプットして整理し、客観的に見る、または、人に見て貰うことで、自分で分かっているつもりで、分かっていなかったという事に気付くことができます。具体的なことで言うと講演会など、人の話を聴いた後の振り返り用紙はしっかりと書けていますか？四月当初は多くの人が熱心に書いていましたが、今は、そのように向き合えている人が少ないと感じています。この用紙には成績はつきません。だからこそ、何の意味があるのか、もしくは面倒だと思っている人が多いのではないでしょうか。目に見えない評価も大切ですが、見えないものを切にできる人に成って欲しいと願っています。

（砂井博光）

中学二年便り

草魂

日本のプロ野球史上歴代四位となる三一七勝をあげた昭和の大投手は、現役時代、ファンからサインを求められると必ず「草魂」という座右の銘を書いた。

一年目で十勝、二年目以降は五年連続で二十勝以上したが、その後の三年間は低迷が続き、悩みに悩んだドン底の時期があった。

そんなシーズンオフのある日、自宅の庭をぼんやり眺めていると、コンクリート舗装してある部分から緑の雑草の芽が勢いよく生えているのを目にした。こんな小さな雑草の芽に、コンクリートに負けないほどの強大な力が秘められているとは。なんて強い生命力なのだ。打たれても、踏まれても、なおも強く生き、這い上がろうとする雑草のたくましさ…。

以来、逃げる投球はしまいと、真っ向から打者に向かっていった。被本塁打数五六〇本は断トツの歴代一位。同じく歴代一位の無四球試合七八回というこの数字は、小細工などせずに勝負にこだわり続けたことを物語っている。「打者に打たれても腹が立たなくなった。そんな投手が勝負の世界にいる資格はない。」頑固一徹、不器用で、自他共に認めるワガママな大エースの引き際の言葉であった。

君たちは四月から三年生。振り返ると怒りや不満のぶつけどころもない二年間であったかもしれない。だが打たれても、踏みつけられても、また立ち上がり、少しずつ成長していく君たちの姿を、周囲の誰もが頼もしく感じているに違いない。

（古賀賢之）

高校一年便り

今の自分に満足しているか

検温、マスク着用、手指消毒、換気など私たちのルーティンが二年前から変わってしまいました。そして、休校期間、部活動の停止、大会の中止、日々の行動制限などにより、かけがえのない経験も奪われてしまいました。君たちはこの二年間で中学生から高校生になり、そして早いもので最初の一年を終えようとしています。私はそんな君たちに、このタイミングだからこそ考えてもらいたいことがあります。

それは、「今の自分に満足しているのか」ということです。やるべきこと、やりたかったこと、二年前に想像していた高校一年生の自分に成れているのでしょうか。コロナ禍で失った経験と時間は戻ってきません。でも、いつまでもコロナのせいにはできないのです。その当時は苦しかったが、今振り返ればその経験を活かせているのか否かは、自分がよく知っています。今の自分に満足できていないのであれば、それはこの二年間の環境のせいではなく、自分の努力不足と諦めた心の問題なのです。

偉そうに言っている当の私は自分に満足できていない一人です。もっと全力を尽くせたのではないのか、最善の選択ができたのではないのか、振り返ると自分に後悔しかありません。私のような歳になれば挽回するチャンスすら限られてきますが、君たちには最大の武器である若さがあります。挑戦できる、やり直せるチャンスは無限にあります。昨日閉会した北京オリンピックで挑戦するアスリートの姿を見て、尚更そう思いました。

過去や環境を恨むより、自分と未来に期待を持ち、諦めずに生きていこう。四月からも宜しくお願い致します。

（梅野伸也）

高校二年便り

最後の年の選択

「報われない努力だったのかもしれない。」

北京オリンピックの競技後、羽生選手が口にした言葉である。確かに、努力が望んだその時には、報われないこともあるだろう。オリンピックでもそういう選手は何人も見られた。けれども、「無駄な努力」は無いと私は思っている。努力したその時間は決して消えず、成果はその瞬間には上げられずとも、どこかで必ず何かに結びつくものだと思うからだ。努力は自分の中に何かを残す。

一方で、すべき時にすべき努力をしなかった場合、「無駄な時間」が流れるとは思う。後からではできない努力もある。敢えて「何もしない」という選択をするのは、人生のもっと先の話。目の前にできる努力があるのに、言い訳ばかりして逃げている自分がいないだろうか。なんてもったいない！しかし残念ながら人間そう気づくのは、いつもできる瞬間が過ぎてしまってからなのである。

高校最後の一年が、とうとう始まる。面白くするのもつまらなくするのも、自分次第。努力しなければ疲れないだろうが、貴重な時間を無駄にする。そして何より（本人は気づいていないかもしれないが）、ただただ格好悪い。

何かを残すのか、何も残らないまま終わるのか。その選択ができるあなたたちが羨ましい。

（廣瀬由紀）